

『ボヘミアン・ラブソディ』の シネマティック・コミュニケーション

桑 子 順 子*

[キーワード] 『ボヘミアン・ラブソディ』、構造、映像、コミュニケーション

[要旨] 映画『ボヘミアン・ラブソディ (Bohemian Rhapsody)』(2018)は世界中で多くの観客動員数を記録し高い興行収益を上げ、多くの映画賞も獲得しているが、それに比べると映画批評家の評判はあまり芳しくはない。なぜそのようなことが生じるのかも含めてこの映画における劇構造を中心に、映画で成り立っている最も重要なコミュニケーションとは何かを探る試みである。劇の構造、ストーリーの描かれ方、さらに *Bohemian Rhapsody* というタイトルが意味するものは何なのかの三つを軸にして映画を読み解きたい。

はじめに

映画『ボヘミアン・ラブソディ (Bohemian Rhapsody)』(2018)は、世界で史上最高の売上を記録¹⁾した音楽伝記的映画となっている。さらに伝記映画としても史上最高の興行収入を記録し²⁾、LGBT映画としても興行成績最高の興行収入を記録した³⁾とされている。日本でも記録的な興行収益をあげてアジアでは最大のものとなった⁴⁾のである。この膨大な観客層に比して映画評は賛否両論であり映画の何が世界中の人々を魅了するのかは説明が難しいのである。

先行研究としては、音楽の伝記的映画作品のジャンルから伝記の信憑性のあり方を読み解こうとする⁵⁾もの、映画の心理的な描写から類似するストーリーの映画と組み合わせてこの映画を読み解こうとする⁶⁾もの、さらにこの映画の後で制作されたミュージシャンの伝記的映画の『ロケットマン』と比較するものなどがある。また、映画の中のLGBT的な要素からの読み解き⁷⁾や映画編集の分析などもあるが、『ボヘミアン・ラブソディ』とは一体どういう映画なのかを正面から扱うものは未だあまりみかけない。したがってこの映画がコミュニケーションを成立させている状況を三つに分けて、映画が人の心をつかむメッセージとして観客に伝えているものは何かを探りたい。

1. ブックエンド型の劇構造とその意義

この映画の劇構造の最も明確で巧妙なものはブックエンド型の構造である。映画のオープニングシーンの4分間弱は、フレディ・マーキュリーが起床してから1985年のライブエイド

* 教授／英文学

(LIVE AID)の会場へと向かい、その舞台へと上っていく瞬間までが描かれている。この映画のクライマックスはラスト・シーンであり、伝説となったライブエイドのクイーンのステージの再現の場面で、ブックエンド構造が閉じられる。このようにこの映画はエンド・クレジットの部分を除くと何度でも最初に戻ることが可能であるかのように構成されている。

この構造の持つ意味は、この映画がライブエイドの映像の構築で強化されることによって、伝記的映画を繰り返し再生することを観客に促しうるので、終わりよければすべてよしという表面的なエンディングにならずにすむとも考えられる。すなわちライブエイドの場面の再現映像は、2004年に発売された記録映像などとの比較映像⁸⁾を見てもわかるように忠実に再現されたものであり、映画の虚像とドキュメンタリー映像とが映画の作り上げた虚構の世界の中で連続しうからである。

映画の冒頭部分であるブックエンドの開始の場面は、映画の虚構の世界への説明的な誘導でもある。フレディ・マーキュリーを演じるレミ・マレックがうつぶせでベッドに横たわる片手のクローズ・アップから始まるが、カメラが頭部に寄っていても画面には彼の顔の三分の一ほどが右目を中心にしか映されていない。マニアックに画面を凝視するとマーキュリーを演じる俳優マレックの瞳はやや緑がかっていて、マーキュリーの茶色ではない。瞳の色の違いが重要なのではなく、映画においてマーキュリーを演じる俳優のマレックを受け入れる準備を、観客は徐々にしているのである。

オープニングのセグメントで映像はライブエイドの会場であるウェンブリー・スタジアムの状況と行き来するが、ベッドで起き上がるマーキュリーは咳をする小さな背中のみ、ハサミでひげを整える首から上の一部分のみ、五匹の猫が朝食を食べている間を歩いて抜ける彼の膝から下のみ、ようやく全身が写されても後ろ姿だけの映像である。玄関を出て車に乗り込み、屋敷を出ていく車のクラクションが軽く鳴らされると、車を見送るように窓辺にいる二匹の猫たちと観客は視線を共有し、車の中にいる映像ではみえないが、これから映画で、レミ・マレックによって演じられるフレディ・マーキュリーを見送るのである。

スタジアムに到着してもマーキュリーは暗いサングラスをかけたヘッドショットのみで、観客は主にその後ろ姿の映像をカメラと一緒に追うのである。このように実在の人物の伝記的映画は、観客が映画を見ている間、実在の人物の画像、映像を映画で演じている俳優からある程度切り離すことを促されるし、その必要がある。伝記的映画作品は実在する人物に近似した再現映像を映すために制作されるわけではないからである。クイーンの場合はこれまですでに多くの映画や曲のプロモーションビデオが制作されていてコンサートの記録映像も多いために、実際の映像を忘れるのはかなり困難である。しかし映画全体を酷評する映画評においてもレミ・マレックのフレディ・マーキュリーを演じる演技は高く評価されている場合が多い。

オープニングシーンでなされている工夫は、ウェンブリー・スタジアムの実況を除いてセリフは一つもなく映像だけが進み、クイーンの「愛にすべてを (Somebody to Love)」がフル・コーラスで音楽として流れ続けていることでもある。この映画のテーマの一つは、この曲の歌詞

のリフレインである「私に愛する人を見つけてほしい (“Find me somebody to love”)」である。したがってこのブックエンドの終わりの部分で、マーキュリーが「愛する人」を見つけるというストーリーの構造になっている。

ブックエンド構造の意義は、ライブエイドの伝説の21分間をいかに映像として再現するかにかかってくるのだが、この映画が多くの人を引きつけるのはこのラスト・シーンである。この場面におけるクイーンの演奏の再現は細部にわたる緻密な構築であるだけでなく、フレディ・マーキュリーを中心にクイーンがミュージシャンとして音楽を創り出すことにいかに情熱をこめて演奏しているか、そしてそれがライブで観客とどのように一体になるかが映像化されることが重要なのである。クイーンのパフォーマンスと共鳴するスタジアムを埋めつくす群衆のCGの技術を駆使⁹⁾して創り出された映像は、実際のライブエイドの記録映像と同じようにクイーンと音楽によるコミュニケーションで一体化する画像が組み立てられていて、さらにフレディ・マーキュリーとクイーンの音源を使用することで演奏のリアリティが確保されている。この場面が観客をもっとも感覚的に魅了するのはこれまで世界中で記録的なヒットを生み出すことができたその音楽性と、おそらく、それに共鳴する観衆のドローン・カメラも含めた最新技術のカメラ・レンズ¹⁰⁾による映像の鮮明で滑らかなスピード感であろう。ドローン・カメラの映像は、ウェンブリー・スタジアムのはるか上空から急降下して観客の頭上をなめるように舞台へと迫る観客席からステージへ方向と、フレディ・マーキュリーとクイーンのパフォーマンスのメッセージが運ばれていくかのようにステージから観客席の一番後ろに向かう方向の両方向があって、この映画のクライマックスの効果的で感覚的な波形を創り出している。

一方でこの場面の感覚の波に乗れない場合は、映画のあらゆる映像のストーリー構成を中心とした曖昧で断片的な配置に対し批判的になると考えられる。ストーリーの構成については後で述べるが、フレディ・マーキュリーの伝記的映画はおそらく一本の映画作品ですべてを描き出すことは困難である。さらにクイーンの活動は現在まで断続的に20年に渡って続くほど長く、生み出された音楽も多様な要素を含みながら世界中でヒットし多くの記録を残している。マーキュリーが45歳の若さでしかもエイズ(AIDS)の治療法が確立する前に悲劇的に逝去したこともあり、すでに多くの伝記が書かれ様々な映像や情報が書誌やデジタル上で大量に蓄積されてもいるのだ。

クイーンとフレディ・マーキュリーについての音楽体験があったり伝記的な情報をすでに得ていたりする観客は、おそらくCGの技術を駆使して作りされた合成された虚像の観客に立ち、フレディ・マーキュリーのヴォーカルとクイーンの演奏の実際の記録映像や音源と、映画の画面のラミ・マレックやクイーンのメンバーの口パクと架空の演奏とを重ねられなくなってしまうのである。つまりブックエンド構造は機能なくなり、失敗に近い映画としか捉えられなくなってしまうのである。

一方でクイーンの音楽を同時代に聴き、ライブエイドをリアルタイムで視聴した観客であっても、クイーンの音楽とフレディ・マーキュリーが一人ひとりの観客と一体化する感覚を映像

化しているドローン・カメラによる観客のうねりの映像は、過去の体験を新たな映像で生き返らせているように見えるかもしれない。ドローン・カメラでのみとらえられる観客とクイーンとを行き来する動きの映像が、この映画で効果的に使われていることは否定できない。かくしてブックエンド構造の構築は特に映画の映像と音楽のコミュニケーションを最大限に生かして閉じられているのである。

映画が始まる前に、制作会社の20世紀フォックス(現在は20世紀スタジオ)のファンファーレが流れるが、それはクイーンのブライアン・メイがアレンジし、演奏にはロジャー・テイラーも加わり演奏しているこの映画専用の特別バージョンである。リージェンシー・エンタープライズ(Regency Enterprises)のロゴマークが浮かび上がってくる次の映像にはフレディ・マーキュリーの「ヘイ、ヘイ、ヘイ、ヘイ、ヘーイー! (Hey, hey, hey, hey, heeey!)」という声が入っている。

最後は、ライブエイドの舞台演奏が終わった時点で映画のストーリーは終了し、ライブエイドの映像が消える前に、「ドント・ストップ・ミー・ナウ」¹¹⁾の出だしをアカペラで歌うマーキュリーの声でクイーンの曲が始まり、暗転した画面にフレディおよびクイーンと家族の5枚の写真が次々に、マーキュリーの1991年の逝去と、晩年のジム・ハットン、メアリー・オーステインとの関係、映画のタイトルになっている「ボヘミアン・ラブソディ」が死後に再発売され一位になったこと、エイズ患者支援基金『マーキュリー・フェニックス・トラスト』が設立されたことの説明の字幕とともに画面に出たあとエンド・クレジットの画像になる。キャストの表示になると画面左側には1979年に撮影された「ドント・ストップ・ミー・ナウ」のプロモーションビデオの映像の後半部分が写し出される。そのビデオが終わるとエンド・クレジットが続く間、続けて「ショウ・マスト・ゴー・オン」¹²⁾の曲だけが流れクレジットのみの画面になる。クイーンの熱心なファンであればこの曲が収録された1991年にはフレディ・マーキュリーの病状が悪化していてそのためプロモーションビデオはそれまでのプロモーションビデオの映像の編集になっていることを想起するかもしれない。

このように映画全体を見渡すとブックエンド構造は実は二重になっていて、実在のフレディ・マーキュリーとクイーンによって外枠ががっちり囲まれている。このつくりはある意味では、実在のクイーンは描き切れていないと表明していることにもなりかねない。すでに述べたように伝記的な映画は「そっくりさん」の動画を映し出すとか物真似ショーを目指すものではないので、実在の人物の映像と異なるのは必然であり、演じられたラミ・マレックのマーキュリーに対するアンチクライマックスである。この額縁による入れ子構造は、映画の冒頭のシーンに戻る循環を示唆する映画のブックエンド構造を補強するものではない。

映画ではなくイギリス演劇のブックエンド構造の元祖的なものは、ウィリアム・シェイクスピアの『夏の夜の夢』である。この劇では一幕一場においてアテネの公爵シーシアスとその婚約者ヒポリタが登場して四日後に自分たちの婚礼が行われることを語る。最終幕の第五幕において公爵たちの結婚は、二組の若者の結婚も加え成立し、その後の劇中劇の余興で祝福されて、

最後に登場した妖精たちが結婚の祝福をして終わる。この構造は『ボヘミアン・ラブソディ』の映画と関係はないが、『夏の夜の夢』のブックエンド構造の幕切れに妖精パックが一人残って有名なエピローグを述べる。

パックは『夏の夜の夢』の登場人物の妖精としてではなく、劇を演じた役者つまり人間に戻ってエピローグを述べている。劇のタイトルの「夢」と関連づけて、観客に対して「もし今見た芝居が気に入らない場合は、居眠りの間に見たつまらない夢だと思ってください」と述べるのだが、劇の構造からみると、芝居が気に入らなかった観客への言い訳の口上にとどまってはいることがわかる。パックはセリフを劇中人物として述べずに、一人の役者として観客を観客として意識して、演劇でつくりあげたはずの虚構を取り払ってみせるのである。これによってブックエンド構造で語られた劇は、ピッタリと喜劇の結末に安易に収まったようにみえながら、メタ・シアターを意識化し、さらに現実と虚構の境界を曖昧にしているのである。つまり〈劇についての劇〉を〈観客は体験〉していたことに気がつき、劇で描かれていた世界について、演じられた劇について深く考えることになる。

『ボヘミアン・ラブソディ』の映画につけられている外枠は、映画の俳優たちが演じることによって作り上げられたクイーンのステージでのパフォーマンスが、ライブエイドの観客の一人ひとりとコミュニケーションを成立させていることの映像のリアリティを危うくしている。すなわち映画の世界についてではなく、現実の実在したフレディ・マーキュリーとクイーンの映像こそがリアリティを持つものとして観客の意識の中に顕在化することになりかねない。

このブックエンド型の構造の意義とその外枠の存在価値の有無は、当然ながら、この枠の中にどのようなストーリーがどのように描かれるか次第であることはいうまでもない。

2. 映画のストーリーとその問題点

『ボヘミアン・ラブソディ』の映画のストーリーはどちらかというと単純であり、そのこと自体も問題視されている。大まかに三つのストーリーがあり、一つ目はフレディ・マーキュリーの出自からくるものでゾロアスター教徒パールシーの両親とともにザンジバル革命を逃れてイギリスの移民となったのだが、マーキュリーはゾロアスター教の教義に従って生きる両親から自由に生きたいと考える。マーキュリーの最初のセリフは「パキスタン出身じゃない(I'm not from Pakistan)」であり、彼にとって人種とセクシュアリティの問題は両親からの離脱がないと解決しない。メアリー・オースティンと恋に落ち婚約することが彼の人種の肯定への道筋として描かれ、セクシュアリティの描出はストレート・ウォッシング¹³⁾であると批判されている¹⁴⁾。

二つ目はクイーンがすぐれた音楽を生み出し世界的に活躍する中でマーキュリーが自分のセクシュアリティに悩みが深刻化するものだ。ゲイであることがスキャンダラスに扱われる時代を背景に、マネージャーのポール・ブレンターがあらゆるトラブルの元凶の狂言回しとなってマーキュリーからクイーンのメンバーやオースティンを疎外しソロ活動の開始で孤立させ、自暴自棄的な状況に陥るストーリーである。

三つ目はライブエイドへの出演に向かうストーリーで、オースティンがソロ活動の悪夢的状況からの抜け出すきっかけを作り、マーキュリーはプレンターと縁を切り、クイーンへの復帰を熱望し再結成してライブエイドの準備を始めて伝説のパフォーマンスを成功させるというストーリーである。

このストーリーが問題視されるのは、ポール・プレンターだけが悪事の根源として描かれ、フレディ・マーキュリーの同性愛への志向のセクシュアリティは消毒されていて、物議を醸しかねない領域の要素は削除されて異性愛こそが正常であるような印象を与えているからである。マーキュリーのセクシュアリティについての内面の葛藤は掘り下げられないことがない。さらにいえばクイーンの名曲が作り上げられる場面もどちらかというと断片的であり、フレディ・マーキュリーのステージでのパフォーマンスがそのきらびやかで多彩な衣装と多くのデザインは画面に映し出されるだけでそれが彼自身の誇り高い自信に満ちたアイデンティティの表現でありながら、しかもそれは装いであるという建前がついていることへの追及はされていない。

この映画のストーリーは伝記的映画であるために、クイーンについての情報をあまり知らない観客は、どの程度実話を基にしているのかどうかということがどうしても気になってくる。『ボヘミアン・ラブソディ』については *Information Is Beautiful* というウェブサイトにある “Based on a True, True Story?” というセクションで詳細に調べ上げてある。このサイトによるとこの映画は、79.9%が事実に基づいて作られている¹⁵⁾。

さらに興味深いのは、この映画がストーリーを進めていくプロットのポイントとなる部分の殆どが、事実に基づいていないという情報である。まず悪党役のポール・プレンターはこの映画で事実関係とは殆ど異なる状況で描かれていることが解り、同性愛の関係と裏切りや決別などのポイントでの役回りはすべてフィクションであることがわかる。さらにいえばメアリー・オースティンとのストーリーも事実に基づいて描かれたストーリーは殆どない。したがってこの映画に向けられている多くの批判は、事実に基づいていない筋立てについてであることがわかり、事実に基づいていない20.1%が映画のストーリーを回すポイントになっていることが、最も問題なのである。

三つのストーリーは圧縮されてハッピーエンドへとまとめられてしまう。マーキュリー自身の出自はパキと呼ばれた被差別の状況から白人のグループに帰属することで解消するかのようにも描かれ¹⁶⁾、マーキュリーのセクシュアリティの問題は、家族との和解に同席する友人である愛する人を見つけることで解決するのである。このように描かれるストーリーについて、マーク・マクリーリー (Mark McCleerey) の論考¹⁷⁾ は興味深い見方をしている。

マクリーリーは『ボヘミアン・ラブソディ』で描かれるのは「新しいヘテロ・ノーマル」であるかもしれないと述べていて、映画自体は家族向けのクイーンのPG-13バージョンであり、マーキュリーというスター・イメージの消毒をし、クイーンのパンドを磨き上げるものだと批判的でありながら、この劇で描かれるセクシュアリティにかすかではあるが新しい希望を見出している。

異性愛を正常とみなす異性規範は「絶えず書き換え可能である」として『ボヘミアン・ラブソディ』が「同性愛者へのコミットメントを正規化したもの」として位置づけている。同時にメアリー・オースティンがあらわすのは異性愛という「正常性」であり、ポール・プレンターは快楽主義的な同性愛という正常ではないものというストーリーが構成されている。その中で強調されるのはオースティンが告げる妊娠に象徴される「家族の重要性」であり、クイーンのメンバーは家族であることが強調され、ジム・ハットンはマーキュリーの家族の一員になることで真の愛として受け入れられるのだと主張する。

マクリーリーがこのストーリーにかすかな希望を見出すのはリチャード・コーリスが指摘している「映画のロマンスのルールでは、ヒーローは2つの真の愛を持つことができない」という規則を『ボヘミアン・ラブソディ』のライブエイドの映像が破っている点である。すなわちラスト・シーンでライブエイドのステージの袖に立つメアリー・オースティンとジム・ハットンの二人は文字通り手を取り合って立ち並んでフレディ・マーキュリーを、愛情をこめて見つめているのであり、「二つの『真の愛』を持つ主人公を構築したという点で、本当に驚くべきことを成し遂げた」と述べるのである。

このように映画のストーリー・ラインは単純ではあるが、映画がストーリーのコミュニケーションを成り立たせる上で重要なシーンの編集についてはアカデミー賞の最優秀編集賞を受賞しているにもかかわらず、問題が多いと指摘されている。途中から監督が代わり、追加で撮影された部分と合わせて限られた時間に編集されたことが言い訳にはできないようなまづい編集の部分の詳細な分析映像も公開¹⁸⁾されている。しかも最悪の編集とされているごく短い場面には、殆ど唐突に、ポール・プレンターが登場するのだ。この映画の編集はストーリーを阻害しているというよりは矢継ぎ早に引き続いていく多くのカットによって、単純なストーリーを意味のある複雑なものであるように見せ、そぎ落とされている伝記的な情報を曖昧化しているのではないだろうか。

映画の編集の仕方次第で映画のストーリーは変わりうるが、この映画にはそれほど複雑なストーリーはもともと存在していない。上のマクリーリーの指摘する二つの真実の愛がブックエンドの最後でマーキュリーの求めていた「愛する人」であることは丁寧に編集されて映し出されている。ステージの映像は、マーキュリーの両親の家をカットバックで行き来し、マーキュリーが真に愛する人の二人の立つステージの袖ともカットバックで行き来しているのだ。

『ボヘミアン・ラブソディ』においては、伝記的映画としては問題のある映画のストーリーが、問題もある映画の編集によって、結果的にはあらたな意義を提示するコミュニケーションを成立させていて、それがブックエンド構造とそれを囲む額縁のような映像の中から外に出ることに意義を与えていると考えられる。つまりそれは映画を見た膨大な数の観客が、フレディ・マーキュリーやクイーンの実像や音楽作品について数多くアクセスし始めたことである。おそらくこれは伝記的映画としては最大の目的を果たしたことになるであろう。

3. 『ボヘミアン・ラブソディ』のタイトルからの考察

『ボヘミアン・ラブソディ』のタイトルは、映画でも曲のレコーディングが映像化されているクイーンの同名の曲のタイトルである。「ボヘミアン」の意味は *Oxford English Dictionary* では、3として「社会のジプシー；自分が適している社会から何らかの方法で自分自身を断ち切るか、または自分の習慣によって断ち切れる人。特に、自由で、気まぐれな、または不規則な生活を送り、自分が多分に係わる社会にこだわらず、一般的に慣習を軽蔑している芸術家、文学者、または俳優。（道徳への言及の有無にかかわらず、かなりの寛容さで使用される）」とある。「ラブソディ」は1の「叙事詩」の意味もあるだろうが、4の「感情や感情の高揚した、または誇張された熱狂的な表現。アイデアと表現の贅沢さを特徴とするが、関連する思考や堅実な議論がない発露（スピーチ、手紙、詩など）」とある。すなわち単純に言えば、「慣習にとらわれない熱狂詩」である¹⁹⁾。映画の中でもこの曲のコンセプトについてクイーンのメンバーが語っている。

映画の中でフレディ・マーキュリーはこの曲のコンセプトを「オペラの規模で、ギリシヤ悲劇のペイソス、シェイクスピアのウィット、ミュージカル劇場の無限の喜び」を持つ「音楽体験」であり「ロックンロールのオペラ」であると述べている。この曲の音楽と歌詞は豊かなストーリーを持つ濃密なメッセージの熱狂的な横溢であり、この曲がタイトルになっているということは、映画全体がフレディ・マーキュリーとクイーンの音楽体験でもありうる。しかしすでに述べてように映画のストーリーは豊かとはいえず貧弱で単純なものである。では一体映画は何を「オペラの規模を持つギリシヤ悲劇の哀愁とシェイクスピアの機知とミュージカルの無限の喜び」として描き出しているのだろうか。

映画がもっとも得意とするコミュニケーションによってそれは成立しているものでなければならない。なぜならこの映画が世界中ヒットし、この映画を見たことによってこそフレディ・マーキュリーとクイーンへの関心が再び世界中で起こったのであるからそう考えざるを得ない。ギリシヤ悲劇とシェイクスピアとミュージカルとオペラに共通するのは劇場である。まず劇場というより劇場性(theatricality)に着目する必要²⁰⁾がある。劇場性は映画の中の衣装の画像とフレディ・マーキュリーとクイーンのステージの映像の中に存在する。

シェイラ・ホワイトリー (Sheila Whiteley) は「ボヘミアン・ラブソディ」を説明しながらマーキュリーのキャンプの芝居がかった言動 (Mercury's camp theatrics) は、それまでの異性愛中心のロック音楽と対極をなすものとして指摘し、ザンドラローズのシルク、マニキュア、メイクの使用はすべて「他者」の感覚に貢献するマーキュリーのフリート・ストリートのセクシュアリティへの執着を表していると説明する (Whiteley, 2006, 251)。

これらはいわゆるスーザン・ソntag (Susan Sontag) の「キャンプ」つまり「不自然なもの・人工的なもの・誇張されたもの」に引きつけられる感受性がロック音楽と結びついて、グラムロックにおけるジェンダーの装いとも連続していくものである。ソntagは「劇場で役を演じる感覚」を日常生活に持ち込む様式で出現する芸術・表象を「キャンプ」と名づけた (Sontag,

34, 68) のだが、この映画では感受性と音楽、ジェンダーの装いと音楽の関係性やマーキュリーの嗜好について深く掘り下げられることはないが、マーキュリーだけではなくクイーンのメンバー衣装のシルクや、マニュキュアやメイクの画像は映画の画面にあふれ、芝居がかった言動のステージのフレディ・マーキュリーのパフォーマンスの動画も画面を覆い尽くしている。これらはキャンプやグラムロックの表象²¹⁾として意味があるというよりも、フレディ・マーキュリーの「演じるということの意識」が映像化されていくことに重要な意味がある。

ホワイトリーは特にマーキュリーの劇場性は、セクシュアリティをクローゼットにしまい込むことのできる「衣装」であることが時代的に重要であるとも述べている (Whiteley, 23-25)。しかし映画に映し出されるのはセクシュアリティの隠蔽工作ではなく、他者を演じる劇場性の多様性である。当然「ボヘミアン・ラブソディ」の歌詞を読み解き、音楽のメロディとともに壮大に広がる物語の存在を見出すことで映画と連続するタイトルの意義を解釈することも可能である。

しかしここで映画が観客に伝えることは何かに限定して考えるとフレディ・マーキュリーのキャンプな装いが、レミ・マレックによって演じられているということである。つまり映画は、グラムロックの派手で演劇的な外観と、ジェンダーの固定観念とセクシュアリティ (アンドロジニー) に挑むことが演じられることを意識化している。

クリスティン・ソリー (Kristen Sollee) は「クイアなアイデンティティが視覚的に実行され、キッチュ、過剰、自己意識的なパロディを前景とする特定の審美的談話を通じて形成される方法」を説明するのにクイーンのカムバックビデオがフレディ・マーキュリーによって設計されたキャンプの視覚性の明確な例を表現しつつ、彼自身のクイアネスに対処するセラピーの芸術的な形であると主張する (Sollee, 51)。

さらに、ラミ・マレックの並外れたマーキュリーの描写は、並外れたものであることを評価しつつも「映画が典型的なハリウッド・スタイルで砂糖をまぶすようにマーキュリーの非常に問題の多いライフ・ストーリーをキャンプからグラムに変えた (Sollee, 55)」と指摘する。キャンプとグラムの明確な違いはさておき、ラミ・マレックの演技のもたらすものは、おそらく彼の身に着けているもの、衣装から小道具いたるまでが「他者への装い」のためのものであり、「演じること」によってパフォーマンスを見せる演技者の動画の表象である。

このように考えるとこの映画は直接的にはないが、フレディ・マーキュリーのステージにおけるカリスマ性が「演じる」という意識から生み出されていることを明確に描き出していることになる。しかもステージの上では演技者としての自分のアイデンティティは誇り高いものであり、自信に満ちた彼自身でもあるわけであり、自分自身であることの力強い映像として観客一人一人に伝わってくるのである。この映画は、実は「演じる」ということについての映画化なのである。

おわりに

『ボヘミアン・ラブソディ』の映画は、その音楽性と映像に頼った作品である。伝記的映画としてはかなり異色ではあるが、ミュージシャンの伝記映画はおおむね主人公が映画の音楽を支配し、映画は音楽によっても描かれていく。その時伝記的な事実はそれほど重要ではないのかもしれない。ミュージシャンとしてどう生きたのかということを伝えることができれば、事実関係は他の資料で追うことも可能であろう。ただクイーンのフレディ・マーキュリーの場合は音楽によって描くだけではなくそのパフォーマンスを描かなければミュージシャンとしてどう生きたかを描くことにはならない。

ステージにおけるフレディ・マーキュリーの演じることで確立するアイデンティティは、ラミ・マレックの演技で映画から伝わってくる。人はおそらく自分とは何かを問い続けて生きているに違いない。だからこそステージに立つことで全力を尽くしてアイデンティティを獲得するフレディ・マーキュリーの姿に共感できるのであろう。

Works Cited

- Beshara, Robert K. "Freddie versus Maya: A Textual Analysis of Two Narrative Structurations of (Post) colonial 'Brown' Subjectivity as read through Lacanian Film Theory." *Film Criticism* 43.1 (2019).
- Bohemian Rhapsody*, Directed by Bryan Singer, 20th Century Fox, Regency Enterprise and GK Films, 2018.
- Botescu-Sireteanu, Ileana. "Queer in Queen: Camp aesthetics and queer performativity in Queen's music videos." *Bulletin of the Transilvania University of Braşov, Series IV: Philology & Cultural Studies* 12.1 (2019): 87-100.
- Desowitz, Bill. "'Bohemian Rhapsody': The Challenge of Shooting the Live Aid Re-Creation to Do Freddie Mercury Justice". *Indie Wire*. Nov 5, 2018 2:25 pm.
- Leighton-Dore, Samuel. "'Bohemian Rhapsody' becomes highest grossing LGBTIQ+ movie ever". *SBS*. 21 November 2018.
- Levine, Nick. "Who was the real Freddie Mercury?" BBC.com.
<https://www.bbc.com/culture/article/20191010-who-was-the-real-freddie-mercury>.
- Loughrey, Clarisse. "Bohemian Rhapsody review: This karaoke-style paean is all style, no soul". *Independent*. 24 October 2018 08:13. <https://www.independent.co.uk/arts-entertainment/films/reviews/bohemian-rhapsody-review-rami-malek-release-date-queen-film-soundtrack-a8598776.html>. Retrieved 23 July 2020.
- McCleerey, Mark. "Bohemian Normativity: *Bohemian Rhapsody* and the New Heteronormal." *Film Criticism* 43.3 (2019).
- Mendelson, Scott. "'Bohemian Rhapsody' Remains Box Office Queen With Supersonic \$285M Cume". *Forbes*. 11 November 2018.
- Odell, Grace Kate. *A Night at the Opera: Performance, Theatricality, and Identity in the Music of Queen*. Diss. University of Missouri-Kansas City, 2019.
- Olive, Bobby. "The Evolution of Queen's 'Don't Stop Me Now': How a Minor Hit Became One of The

- Band's Most Beloved (And Inescapable) Songs". Billboard. 6 March 2019.
- PTI. "Bohemian Rhapsody becomes highest-grossing biopic of all time". *The Indian Express*. 17 December 2018.
- Scott, Ryan "Vanilla Ice Biopic Happening with Dave Franco in the Lead?". *MovieWeb*. 4 January 2019.
- El-Shawa, Sahba, *et al.* "“Is this the real life? Is this just fantasy?”: Human proxemic preferences for recognizing robot gestures in physical reality and virtual reality." 2017 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS). *IEEE*, 2017.
- Sollee, Kristen. "Hysteric Desire: Sexual Positions, Sonic Subjectivity and Gender Play in Glam Metal." *Can I Play with Madness* (2011): 51-62.
- Sontag, Susan. "Notes on 'Camp'". 1968.
classes.dma.ucla.edu/Spring15/104/Susan%20Sontag_%20Notes%20On%20Camp -.pdf.
- Spanos, Brittany. "Korean, Japanese Fans Can't Stop Watching 'Bohemian Rhapsody'". *Rolling Stone*. 10 January 2019.
- Waine, Ted, May Leung, and Paul Norris. "Directable stadium crowds from image based modelling for" *Bohemian Rhapsody*." ACM SIGGRAPH 2019 Talks. 2019. 1-2.
- Whiteley, Sheila. "Which Freddie? Constructions of Masculinity in Freddie Mercury and Justin Hawkins," in *Oh Boy! Making Masculinity in Popular Music* ed. Freya Jarman-Ivens. 21-37. Routledge, 2007.
- Whiteley, Sheila, and Jennifer Rycenga, eds. *Queering the popular pitch*. Routledge, 2006.
- "Bohemian." *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 1989.
- "Rhapsody." *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 1989.
- Singer, Bryan. *Bohemian Rhapsody*. 20th Century Fox, Regency Enterprises, GK Films and Queen Films. 2018.
- Ultimate Queen*. (fan site), <http://www.ultimatequeen.co.uk>. 1999-2020.
- Information Is Beautiful: ideas, issues, knowledge, and data— visualized!* David McCandless. <https://informationisbeautiful.net>. -2020.
- Macmillandictionary.com*. <https://www.macmillandictionary.com>. Macmillan Education Limited 2009–2020
- "100 greatest singers of all time — Freddie Mercury". *Rolling Stone*.

注

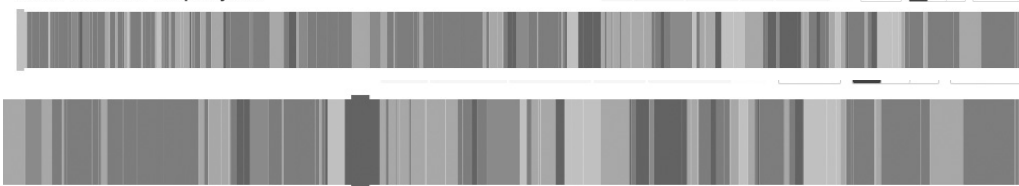
- 1) Scott Mendelson, "'Bohemian Rhapsody' Remains Box Office Queen With Supersonic \$285M Cume". 11 November 2018. *Forbes*.
<https://www.forbes.com/sites/scottmendelson/2018/11/11/bohemian-rhapsody-remains-box-office-queen-with-supersonic-285m-cume/#51693df4575b>. Accessed 19 August 2020.
- 2) Brittany Spanos, "Korean, Japanese Fans Can't Stop Watching 'Bohemian Rhapsody'". *Rolling Stone*. 10 January 2019. <https://www.rollingstone.com/movies/movie-news/bohemian-rhapsody-queen-south-korea-japan-777263>. Accessed 19 August 2020, Ryan Scott, "Vanilla Ice Biopic Happening with Dave

- Franco in the Lead?". *MovieWeb*. 4 January 2019. <https://movieweb.com/vanilla-ice-movie-dave-franco>. Accessed 19 August 2020 and PTI, "Bohemian Rhapsody becomes highest-grossing biopic of all time". *The Indian Express*. 17 December 2018. <https://indianexpress.com/article/entertainment/hollywood/bohemian-rhapsody-highest-grossing-biopic-5498028>. Accessed 19 August 2020.
- 3) Samuel Leighton-Dore, "'Bohemian Rhapsody' becomes highest grossing LGBTIQ+ movie ever". *SBS*. 21 November 2018. <https://www.sbs.com.au/topics/pride/fast-lane/article/2018/11/21/bohemian-rhapsody-becomes-highest-grossing-lgbtqi-movie-ever>. Accessed 14 August 2020.
 - 4) “映画『ボヘミアン・ラブソディ』日本での興収が127億円を突破 世界興収は1,000億円が目前に SPICE – エンタメ特化型情報メディア スパイス”. SPICE(スパイス). eplus Inc. 1 April 2019. <https://spice.eplus.jp/articles/233053>. Accessed 14 August 2020.
 - 5) Jones, Lesley-Ann. "Bohemian Rhapsody: the definitive biography of Freddie Mercury." (2018).、El-Shawwa, Sahba, *et al.* "'Is this the real life? Is this just fantasy?': Human proxemic preferences for recognizing robot gestures in physical reality and virtual reality." 2017 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS). *IEEE*, 2017.
 - 6) Beshara, Robert K. "Freddie versus Maya: A Textual Analysis of Two Narrative Structurations of (Post) colonial 'Brown' Subjectivity as read through Lacanian Film Theory." *Film Criticism* 43.1 (2019).
 - 7) McCleerey, Mark. "Bohemian Normativity: *Bohemian Rhapsody* and the New Heteronormal." *Film Criticism* 43.3 (2019).
 - 8) YouTube(YouTube)上でいくつか比較映像が公開されている。dimitreze, Live Aid | *Bohemian Rhapsody* (2018) - scene comparisons, <https://www.youtube.com/watch?v=2cH5htm6T4E>, Accessed 14 August 2020. Juan Dela Cruz, BOHEMIAN, RHAPSODY MOVIE 2018 [LIVE AID COMPLETE SONGS Side by Side with the QUEEN LIVE AID 1985], <https://www.youtube.com/watch?v=8z6wJHPhJUM>. Accessed 14 August 2020.
 - 9) Waive, Leung, Norris の三人による報告を見ると『ボヘミアン・ラブソディ』の「フォトリアルで、ダイナミックで方向性のあるロック・コンサートのスタジアムを埋めた観衆を再現」の方法が説明されている。「リード VFX ベンダーの DNEG は、マルチビュー・ビデオ・キャプチャと画像ベースのモデリングに基づく新しい群衆シミュレーション・ソリューションを開発」し、ビデオ・カメラ・アレイを使用して、個々の群衆のエキストラによる「合計 70 時間を超える映像で合計 350 時間以上の振りつけが行われたパフォーマンスがセットで取得」されたい。 「ビデオ・データを軽量の 3D スプライトに変換するシステムが開発され、その 3D スプライトは、迅速にレイアウト、同期、編集、大規模にレンダリングが可能になったのである。効率的なアーティストワークフローツールとスケーラブルなビデオ処理技術が開発されたため、群衆シミュレーションの経験がほとんどないクルーでも、フレディ・マーキュリーの感動的なパフォーマンスに反応するダンスと歓声を上げる群衆で仮想ウェンブリー・スタジアムを満たす」映像となっている。
 - 10) この場面はアーノルド リヒター シネ テヒニーク (ARRI) の Alexa65 と新しい DNA レンズで撮影されている。 <https://www.indiewire.com/2018/11/bohemian-rhapsody-live-aid-freddie-mercury-queen-1202016480>. Accessed 10 August 2020.
 - 11) この曲はブライアン・メイの演奏が少ないことで知られているがこの映画で使われている曲に

- はメイがギター演奏を追加している。更にこの曲は発売からかなり経ってからクイーンの最も代表的な曲となったのである。"The Evolution of Queen's 'Don't Stop Me Now': How a Minor Hit Became One of The Band's Most Beloved (And Inescapable) Songs". *Billboard*. Retrieved 18 August 2020. <https://www.billboard.com/articles/columns/rock/8501348/queen-dont-stop-me-now-biggest-hits>. Accessed 10 Aug. 2020. 映画で使用されているプロモーションビデオの詳細は、<http://www.ultimatequeen.co.uk/queen/videos/promo-videos.htm>. Accessed 10 Aug. 2020.
- 12) この曲は1990年、殆ど歩くのも不自由であるほど病状が悪化していたフレディ・マーキュリーによる録音である。 <https://www.rollingstone.com/music/music-lists/100-greatest-singers-of-all-time-147019/joni-mitchell-3-50843>. Accessed 10 Sep. 2020.
- 13) "straightwashing" とは「歴史やフィクションからのゲイやバイセクシュアルのキャラクターをストレートとして描写する行為」である。 <https://www.macmillandictionary.com/dictionary/british/straightwashing>. Accessed 13 August 2020.
- 14) 次の二つのサイトを参照、Dominguez, Alessa. "'Bohemian Rhapsody' Sells A Sanitized Vision Of Freddie Mercury". *BuzzFeed News*. October 30, 2018, at 3:11 p.m. <https://www.buzzfeednews.com/article/pdominguez/bohemian-rhapsody-doesnt-do-freddie-mercurys-queer-life-and>. Accessed 13 Aug. 2020, Giles, Jeff. "Bryan Fuller Accuses 'Bohemian Rhapsody' Biopic of 'Hetwashing' Freddie Mercury's Life". *Ultimate Classic Rock*. Townsquare Media, Inc. May 16, 2018. <https://ultimateclassicrock.com/bohemian-rhapsody-movie-hetwashing/>. Accessed 13 Aug. 2020.
- 15) このサイトでは場面ごとに事実かどうか5つ(不明、虚偽、殆ど虚偽、調整があるが真実、真実)に分けて表示してあるだけでなく、そのシーンを選択すると、映画が始まってからの時刻表示と映画での場面の説明と並べて情報源とともに事実関係が簡単に表示される。

79.9% **Bohemian Rhapsody** 2018

SHOW ONLY TRUE TRUE-ISH FALSE-ISH FALSE UNKNOWN Info Close



01:12:54

Next >

Movie	Reality
Snakey PRENTER has set REID up, and it works. MERCURY, furious at the suggestion of a solo deal, fires REID on the spot, kicks him out of the car.	Mercury actually wanted to go solo and Reid was no longer involved with the band at this point. Reid later said he'd never had any problems with Queen, and 'that's been one of the gentlest parting of the ways of anybody I've ever worked with'. Taylor has said the band had a 'good working relationship with John'.

Sources:
Ultimate Classic Rock

- Based on a true true story. *Information Is Beautiful: ideas, issues, knowledge, and data— visualized!* David McCandless. <https://informationisbeautiful.net/visualizations/based-on-a-true-true-story>. Accessed 15 August 2020.
- 16) ニック・レヴァイン(Nick Levine)は、「フレディ・マーキュリーは白人に成りすます必要があっ

たのだ」という英国パキスタン系インド人でクイアのシンガーソングライターのレオ・カリヤンの言葉を引用しているが、1970年代～80年代はおそらく人種的な差別が強かったと考えられるので、映画は実際の状況を描き出していると考えられる。“Who was the real Freddie Mercury?” <https://www.bbc.com/culture/article/20191010-who-was-the-real-freddie-mercury>, Accessed 13 August 2020.

- 17) McCleerey, Mark. "Bohemian Normativity: *Bohemian Rhapsody* and the New Heteronormal." *Film Criticism* 43.3 (2019).
- 18) Thomas Flight, “*Bohemian Rhapsody* won the Oscar for Best Editing... but it has terrible editing”. はYouTubeにビデオ・エッセイとして公開されている。 https://www.youtube.com/results?search_query=Bohemian+Rhapsody+won+the+Oscar+for+Best+Editing...+but+it+has+terrible+editing. Accessed 13 September 2020. しかもこれに対しては『ボヘミアン・ラプソディ』の映画の編集者ジョン・オットマン(John Ottman)がビデオ・メッセージで返答していてフライトはそれについてのコメントもライブ・ストーリーミングでコメントをのべている。Thomas Flight, John Ottman - *Bohemian Rhapsody's* Editor Responds to My Video - Live Stream w/ Q&A. <https://www.youtube.com/watch?v=qy35Z-JcxIg8>. Accessed 13 September 2020.
- 19) シェイラ・ホワイトリー(Sheila Whiteley)は、マーキュリーが「ボヘミアン・ラプソディ」を書いた年が人生のターニング・ポイントであると指摘する(Whiteley, 2006, 252)。
- 20) Grace Kate Odell は、クイーンの音楽を音楽学の分野から、その楽曲の「演劇性」をさまざまな角度から検討することで、パフォーマンスのさまざまな層とアイデンティティとの関係を読み解いて、クイーンの音楽に深く複雑な演劇性が存在していることを詳細に指摘する。
- 21) グラムロックのパフォーマーは、派手で演劇的な外観(服、衣装、化粧、ヘアスタイル)を特徴とし、ジェンダーの固定観念とセクシュアリティ(アンドロジニー)に挑戦することが多く、ポピュラー音楽のパフォーマンス、ファンダム、ファッションにスペクタクルを生み出したとされている。Mills, Amanda. "7 Glam Britannia." *Global Glam and Popular Music: Style and Spectacle from the 1970s to the 2000s* (2016) 98. 他に Botescu-Sireteanu, Ileana. "Queer in Queen: Camp aesthetics and queer performativity in Queen's music videos." *Bulletin of the Transilvania University of Braşov, Series IV: Philology & Cultural Studies* 12.1 (2019): 87-100.

(2020.9.28 受稿, 2020.11.16 受理)